



リヒテルが愛した執念のピアノ

もうだいぶ前の話ですが、NHKの「プロジェクトX」で「リヒテルが愛した執念のピアノ」というタイトルで、ヤマハのピアノが取り上げられていました。

ヤマハのピアノがリヒテルをはじめ世界中の名ピアニストに愛されるまでの道のりは、それはそれは困難な道のりだったんですね。

主人公はヤマハの銀座店の店員で、調律師になりたくて調律の勉強をしていた村上さんという方です。

ヤマハは戦後まもなくピアノ作りを再開しました。

それは、戦時中ピアノはつくれなかったし、演奏もできませんでしたから、これからは必ずピアノが弾ける時代が来る。そう睨んだのです。

しかし、そのピアノの音は、昭和25年に開かれたグランドピアノを使った演奏会で「ふんどしのゆるんだ音」と酷評されました。

力強いフォルテッシモも、きれいなピアニッシモも出ない。

ピアノメーカーの雌雄を決する最高級のコンサートグランドピアノの分野は、欧米メーカーが圧倒的な優位に立っていたんです。

しかし、それから15年後の昭和40年にピアノ作りは大きな転機を迎えます。

イタリアの奇才、ミケランジェリが来日したのです。彼は現在ではすでに物故していますが、世界中自分のピアノを運んで演奏会をするということで有名でした。

ヤマハの店員、村上さんは彼の演奏会に行きました。演奏が始まってまもなく、彼は客席で打ち震えていました。

「これだ。この音こそ本物だ！」

スタインウェイ！

それはスタインウェイの奏でる音楽でした。

力強いフォルテッシモときれいなピアニッシモ。

ヤマハのピアノとは比べ物にならない素晴らしい音でした。

それから数日後、村上さんが勤めている銀座店にヤマハの川上社長が定期訪問に来ました。

村上さんは意を決して社長に詰め寄り、「社長、いいピアノをつくって下さい！ 日本のピアノは全然ダメです」と直訴しました。

社長はびっくりしましたが、それからすぐにミケランジェリの演奏会に聴きに行ったそうです。

社長は程なく動き始めました。

社長直轄のプロジェクトチームがつくられ、スタインウェイに負けないピアノ作りが始まりました。ミケランジェリ専属のイタリア人調律師タローネを招き、彼に協力を仰ぎました。

「東洋の日本で、これほどまでにピアノ作りに情熱を燃やしているとは…」。
彼はその年の秋にまた来ることを約束して日本を去りました。

それからが大変です。彼が再び来る前に試作機をつくらなければなりません。
プロジェクトチームはまずスタインウェイを分解して一つ一つ真似ることからはじめました。
愚直な手段ですが、それしか方法がなかったのです。
しかし、それでもスタインウェイと同じ響きにはならないのです。それではダメなのです。

やがて秋になり、タローネが約束どおりやって来ました。
村上さんも調律を彼に学ぶために社長に呼ばれていました。

タローネは言いました。「あなた方は100年遅れています！」
当然でしょう。日本にはバッハもモーツァルトもベートーヴェンもいなかったですから、もともと日本には何もピアノの伝統がないのです。

タローネは村上さんにも謎のような言葉を残して日本を去りました。
「宇宙のようなフォルティシモ、空のようなピアノッシモ…」
村上さんはその言葉を理解できませんでした。

川上社長の命令でヨーロッパに「本物の音」を探すために行くことになりました。
彼はタローネのところに下宿させてもらいながら、ヨーロッパじゅうの音楽会に行き、頼み込んでピアノの調律をさせてもらっていました。

そのころ、ソビエトから100年に一度の天才ピアニストがヨーロッパを席卷していました。
スヴァトフラフ・リヒテル、その人でした。
村上さんも彼の演奏を聞きたいと思っていたのですが、いつもチケットがすぐ売り切れてしまい、なかなか聞けません。
そんなとき、自分が調律を担当する演奏会のプログラムにリヒテルの名前を見つけました。なんと、彼が演奏するピアノの調律をするのです！

リヒテルは気ムズカシ屋で有名でした。調律が気に入らないと演奏をボイコットするのです。村上さんの責任は重大でした。やがて演奏会が近づきました。村上さんは精魂込めてリヒテルのピアノの調律を行いました。

「よく調律されている。しかし弾きやさしすぎる！」
リヒテルにそう言われて、村上さんは呆然としましたが、やがて大きな賭けに出ました。鍵盤を支えている極うすいリングを一枚抜いたのです。こうすることによって、鍵盤の押さえに深みが出て、下手な

ピアニストが弾くと、音が響かないのです。

当日の演奏会が終わって、村上さんはリヒテルから「素晴らしい」と誉められました。
こうして村上さんとリヒテルは心を通わせるようになったのです。

そうしている間も日本ではピアノ作りが進み、日本の伝統工芸の技を使って力強いフォルテッシモを響かせることに成功しました。あとはピアニッシモだけです。これは調律師の仕事です。

ちょうどそのとき、村上さんはリヒテルから「日本のピアノを試したい」と依頼を受けました。
早速完成したばかりのピアノが日本から運ばれ、村上さんが調律を行いました。

「素晴らしい！！」

リヒテルが絶賛しました。

こうしてリヒテルが愛したヤマハのピアノは世界中で惹かれるようになりました。

これからです。僕は感動してしまったのは…。

リヒテルは、「私のピアノをつくってくれた人々に感謝の意を表すために彼らの前で演奏会を開きたい」と申し出たのです。

リヒテルは来日して、浜松にあるヤマハの工場へ行き、急ごしらえの演奏会場に200人の従業員を集めて演奏会を行いました。演奏は2時間30分にもおよび、聞いていた従業員はみんな涙を流していました。

偉大なピアニスト、リヒテルは、心の熱い人でもあったのです。

皆さん、どうですか？

僕たちも心の熱い人間でありたいですね。

写真出典：

www.yamaha.co.jp/himekuri/view.php?ymd=19990320